

クロスカリキュラムを通じた表現の可能性

－英語の歌を教材とした創作活動を通じて－

時得紀子*・中村 浩**・水谷桂介**

1. はじめに

今次の中学校学習指導要領の改訂に伴い、音楽科は、「音楽文化についての理解を深める」ことを目標の中に新たに規定した。音によるコミュニケーションを基盤とする音楽活動は、本来、音楽文化そのものを対象とした学習であるということ、このたびその根幹である教科目標の改善をもって、新たに明示したものである。

学校音楽の変遷において、かつては「音楽」を西洋のクラシック音楽と捉える時期もあったが、長い時を経て、今回の新学習指導要領では、我が国および諸外国のさまざまな音楽を教材として扱うことで音楽文化の多様性を理解することの重要性が大きく掲げられた。このように教材として扱う「音楽」のジャンルの拡大と同時に、それぞれの音楽が培われた「音楽文化」の理解のレベルにも学びを深めるという両方の事がらが、今後の学校音楽の中で目指されることになった。

既に、現行の中学校の教科書教材では、小学校のそれと比較しても格段に多様なジャンルの音楽が歌唱や鑑賞の対象となっており、新潟県内の9割の中学校が採択している教育芸術社の教科書には、日本の歌謡曲はもちろん、ポピュラーミュージックと呼ばれるジャンルからはミュージカルの代表的な曲、映画音楽、さらにはロック、ジャズ、タンゴなど、実に多様なジャンルの音楽が掲載されている。

こうした、「多様な音楽を対象に、音楽の楽しさ、よさを感じ、理解できる生徒を育成する」という音楽科のねらいを現実のものとするには、異なる文化で生まれた音楽をより深く理解するためのさまざまな手立てが探究されていかでなければならぬと考える。歌唱であればその国の言葉で歌ってみることで、独自の言葉の響きやニュアンスを感得できるであろうし、その国の文化に触れる学習を取り入れることで、その歌が伝えようとするメッセージを感受したり、より深い楽曲への理解や愛着、さらには表現が深まるであろうことは想像に難くない。

全米でトップクラスの採択率を誇る、マクミラン・マクグローヴヒル社の小・中学校の音楽教科書を参考とするならば、世界各国の有名な曲を極力網羅し、歌曲であればその国の発音で歌うことを取り入れるなど、子どもたちにはオーセンティックな教材に触れさせたいという強い意図が学習のアプローチに反映されている。例えば日本の「さくら」の歌唱教材では“sakura sakura yayoi-no-sora-ha”と原語でも歌唱させ、さらには「五七五七七」という特徴を持つ俳句についての学習を経て、実際に俳句を作る活動に取組ませるなど、音楽活動のみならず、日本の文化の理解についても学習を拡大させている。その他、広くアフリカ、アジアなど諸外国の民謡では歌と共に踊りのステップにも取組む活動に導かれている。例えば先住民族である、アメリカン・インディアン各部族の音楽の特徴的なダンスのステップの違いを実際に踊ってみる活動で体得させるなど、音楽には舞踊が切り離せないものであるという音楽文化の捉え方が盛り込まれている。

翻って我が国において、中学校音楽科の学習活動の重要な位置を占める歌唱活動においては、世界各国からの歌曲をも母国語である日本語に訳して歌唱する例が多い。そのように日本語で歌われる教材に次いで、圧倒的に多いのは英語の歌唱教材であり、「カントリーロード (Take Me Home, Country Roads)」「自由への讃歌 (Hymn To Freedom)」「スカボロー フェア (Scarborough Fair)」「ラヴァース コンチェルト (A Lovers Concerto)」「Hey Jude」(英字原題のみ)など、教育芸術社の扱う曲だけでも枚挙にいとまがない。

しかし近年、時数縮減という音楽科の限定された授業時数の中で、英語の歌詞の意味内容の理解、発音はもちろん、今次改訂の基軸とされる、音楽文化の理解までも深める学習を歌唱指導に組み込むことは、時間的制約の面でも、そして英語や異文化理解の指導の専門的な知識の面でも音楽科の教諭が全てを指導するには、実現が容易ではないというのが現状であろう。

こうした中で本研究の試みは、教科担任制という中学校のスタイルを生かし、クロスカリキュラムを効率的に組み込んだ学習方法を模索したものである。具体的には音楽科と英語科とのチームティーチングによって、英語科の教科目標にも共通するところの国際理解、表現・コミュニケーション力の育成、加えて今日的な課題である、環境、情報など社会にかかわる学習を関連させながら、横断的なアプローチで英語の歌の表現を工夫したり、歌詞の示唆する

* 上越教育大学 ** 上越教育大学附属中学校

メッセージである、環境にかかわる問題について考察を深めるなど、多角的に探究する学習活動を展開していく。

今回の中学校学習指導要領改訂では、生きる力をはぐくむ手立てとして、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力の育成のバランスの重視を大きく掲げている。国際社会にあって英語のさまざまな表現への習熟はもちろん、他者とかかわりながら創作に取組む活動、音楽の特徴を理解し、その音楽を特徴付ける独自の要素を仲間と工夫しながら探究することで、歌唱表現を高める活動は、既習の知識を活かして働かせる活用力を培うことにもつながり、グローバルな視野での人間力育成にもつながっていくものと捉える。

本論の試みはこうした視点から、音楽科と英語科、環境教育の各教科・領域を越境し、教科内の知識、技能をより相互作用的に活用しながら子どもたちの幅広い表現力育成の可能性を探るものである。

2. クロスカリキュラムによる表現活動の可能性

(1) 音楽科の視点から

わが国の子どもたちの課題とされる、表現・コミュニケーション力の不足は、極めて深刻な状況にあることが叫ばれて久しい。このコミュニケーション力の育成は、音楽科のみならず英語科においても共通の課題である。

音楽科では、生徒が自己のイメージや思いを伝え合ったり、他者の意図に共感したりできるようにするなど、表現活動において、生徒同士のコミュニケーション活動を重視した指導を工夫することが学習指導要領にも示されていることを受け、話し合いによって表現を練り上げる過程をパフォーマンス評価によっても見取ることに努めた。

また、従前の「楽曲の豊かさや美しさを感じ取る」から、今回の改訂で「多様な音楽表現の豊かさや美しさを感じ取る」へと目標が変わり、我が国及び諸外国の様々な音楽における表現の多様性への気づき、表現活動を通じて共通性や固有性を感じ取ることを重視し、異文化理解の視点からも今回の楽曲の特徴を体得させることに導いた。加えて、改訂後は、音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて学ぶことも掲げられたため、多くの音楽文化がそうであるように、音楽と共に育まれた舞踊の活動なども示唆されるため、身体表現活動も積極的に促した。さらには、「創意工夫して表現する能力」を伸ばす、あるいは「歌詞の内容や曲想を味わい、曲にふさわしい表現を工夫して歌うこと」「表現したいイメージを持ち、音素材の特徴を生かし、反復、変化、対照などの構成や全体のまとまりを工夫しながら音楽をつくる」といった、音楽科独自の創作活動の視点も支援に盛り込んだ。

本研究調査で採択した教材である、3R'sはリズム・アンド・ブルースという特性から、メロディーもリズムも米国のブラック・カルチャーを反映する要素を含んでいる。即興的な表現による歌唱箇所もあり、生徒にとっては音楽科の教科書教材では取組むことのできないジャンルの楽曲であるともいえる。アフタービートの強烈なリズムに乗せて、ラップのように多くの言葉を当てはめなくてはならない、難易度の高いフレーズを歌いこなすには、イントネーション、強勢、区切りなど英語の音声の特徴をとらえ、正しく聞き取ることがこの歌唱の完成には不可欠である。そのため、今回は身体を音楽リズムに乗せて楽しみながら歌うことで、容易に複雑な単語の連なりなども体得することを目指した。支援に携わる音楽科と英語科とのチームティーチングによって、音楽科単独の教科学習の学びからは生まれぬ、文化と表現を丸ごと体得できる、ヴァイタルな授業を目指すものである。

(2) 英語科の視点から

中学校の学習指導要領では、言語活動における言語使用の場面として、「地域の行事」が挙げられている。そのため、中学校における英語の授業において、言語活動としてクリスマスソングなどの英語の歌を聞いたり、実際に歌ったりする授業は比較的受け入れられている。後述の事前アンケートの⑪からも、英語の授業で英語の歌を聞いたことがある生徒が78%を占めた。

その一方で事前アンケートの⑬からは、実際に英語の授業で英語の歌を歌った経験のある生徒は32%しかおらず、聞いたことがあると答えた生徒の半分以下の割合を占めるに止まっている。しかも、歌ったことがあると回答した生徒の記述の多くは、クリスマスソングやABCソングといったものであった。

生徒たちの回答からも、これまでの英語の授業の中での歌の学習においては、歌唱という能動的な表現活動はあまり行われることなく、実際は単に季節感を演出したり、有名な歌の曲名や歌手、歌詞の意味等を簡単に紹介したりするなど、単なる鑑賞の域を脱していないという現状に止まっていることが明らかとなった。

こうした背景には、英語科では教科の専門性から歌唱活動に踏み込むには時間的な制約や音楽面の指導においても限界があることなども考えられる。そこで本研究は、クロスカリキュラムに着目し、英語の視点にとどまらず、音楽の視点や歌詞の内容によるさまざまな視点から英語の歌の授業を構成することを目指した。主に生徒の学習意欲を喚起することを目的とし、具体的には、英語、音楽、環境教育、表現活動の視点から英語の歌を取り上げた。また、英語の授業の一環で、世界の環境問題の現状やリサイクルの各国比較などを行い、生徒の創作活動や歌唱表現の工夫の源となる、環境への思いをふくらます学習を前半の3時間の英語の授業に組み込んだ。

一方、改訂の教育課程全体におけるキーポイントである「体験と言葉」を重視する実践を意識した。実際、創作活動の随所に英語表現の工夫が要求され、グループごとに言葉のやり取りを通じて演奏の完成度を高めていく必要があったことから、体験を通じて言語表現を活用させる創作活動をふんだんに取り入れることができた。

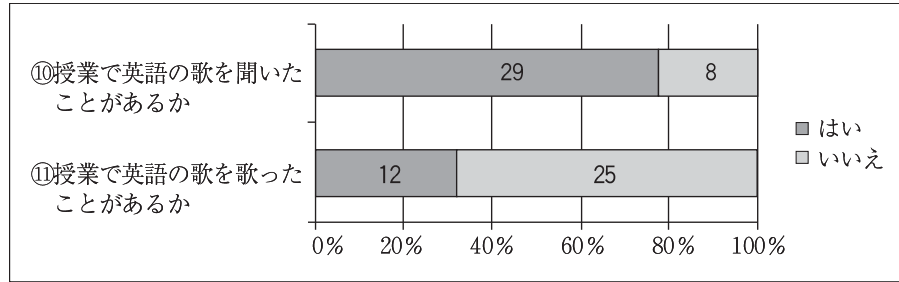


図2 生徒のこれまでの授業における英語の歌とのかかわり

生徒への同様の質問項目および主な回答

- | | |
|---|---|
| <p>⑩ 授業で英語の歌を聞いたことがあるか</p> <p>⑪ ⑩の具体的な曲名の記述（記述の多い順）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ABCの歌 ・曜日の歌 ・クリスマスソング ・ビートルズ ・Let it be ・数字の歌 ・アピレル・ラビーン ・サイモンセズ (simon says) | <p>⑪ 授業で英語の歌を歌ったことがあるか</p> <p>⑫ ⑪の具体的な曲名の記述（記述の多い順）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クリスマスソング ・ABCの歌 ・Let it be. ・曜日の歌 ・数字の歌 ・We wish a merry christmas ・ジングルベル ・サイモンセズ (simon says) ・ビートルズ |
|---|---|

(3) 環境教育の視点から

今回の改革の学力観を育むための基盤ともなった、世界標準学力である、「キー・コンピテンシー」の3つの枠組みの背景に掲げられるように、自らとは異なる文化等をもった他者との接触が増大していたり、グローバリズムが新しい形の相互依存を創出しており、人間の行動が個人の属する地域や国をはるかに超えて環境問題などにも左右されるといった世界規模の現状がある。

こうしたグローバルな視野を踏まえ、環境問題という今日的課題に教科を越えて取組み、知識の表面的な理解に止まらない、思いを他者と共有しながら表現活動を探求する、クロスカリキュラムのアプローチが有効ではないかと捉えた。

3. 研究の目的

本研究は、英語科、音楽科、環境教育、表現活動によるクロスカリキュラムによる授業を実践し、主として以下の点について焦点を絞り、明らかにするものである。

- (1) クロスカリキュラムによる授業は、生徒が音楽の特徴を理解したり、歌唱の際の広義の表現力を培う上で、どのような効果をもたらすか。
- (2) クロスカリキュラムによる授業は、生徒の英語力の伸長にどのような影響を及ぼすか。

4. 方法

対象者は、上越教育大学附属中学校2年生1学級40名（男子20名，女子20名），単元の総時数は5時間。（単元の流れは、資料1参照）授業実施日は平成20年，11月4，5，6日にそれぞれ1時間ずつ，合計3時間は主として英語科を中心とした学習とし，中村が担当した。この3時間には時得も授業の参与観察を行い，必要に応じて歌唱指導に携わった。

さらに12月9日の4，5時間目は4名のミュージシャンたちも加わり，セッションの本番を最終の5時間目に行った。なお，12月9日における授業の対象人数は欠席者を除く37名（男子18名，女子19名）であった。同日実施の2時間続きの授業における指導スタッフの内訳は次の通りである。

歌の伴奏および歌唱指導は次の6名のスタッフで構成：ギター2名：水谷（英語科），および大学院生N，ベース1名：大学院生H，ボイス・パーカッション1名：学部生K，歌唱指導2名：時得（音楽科），中村（英語科）

測定具は，5段階尺度形式と記述による，事前14項目，事後11項目の調査紙を使用した。生徒への事前事後調査共に約20分間の実施時間で各項目の回答を点数化し平均を求めた。アンケート項目は以下の通りである。

<p>〈事前アンケート〉</p> <p>① 普段、英語の歌を聞きますか。</p> <p>② 普段、英語の歌を歌いますか。</p> <p>③ 英語の歌を聞くことは好きですか。</p> <p>④ 英語の歌を歌うことは好きですか。</p> <p>⑤ 授業で、英語の歌を聞くことは好きですか。</p> <p>⑥ 授業で、英語の歌を歌うことは好きですか。</p> <p>⑦ 英語の授業で英語の歌を聞くことは、英語の力を伸ばすことに役立つと思いますか。</p> <p>⑧ ⑦の質問で、あなたが答えた理由を書いてください。</p> <p>⑨ 英語の授業で英語の歌を歌うことは、英語の力を伸ばすことに役立つと思いますか。</p> <p>⑩ ⑨の質問で、あなたが答えた理由を書いてください。</p> <p>⑪ 今までの英語の授業で、英語の歌を聞いたことがありますか。</p> <p>⑫ ⑪の質問で「はい」と答えた人に聞きます、曲名や歌手など覚えている範囲で書いて下さい。</p> <p>⑬ 今までの英語の授業で、英語の歌を歌ったことはありますか。</p> <p>⑭ ⑬の質問で「はい」と答えた人に聞きます、曲名や歌手など覚えている範囲で書いて下さい。</p>	<p>〈事前アンケート〉</p> <p>③ 英語の歌を聞くことは好きですか。</p> <p>④ 英語の歌を歌うことは好きですか。</p> <p>⑤ 授業で、英語の歌を聞くことは好きですか。</p> <p>⑥ 授業で、英語の歌を歌うことは好きですか。</p> <p>⑦ 英語の授業で英語の歌を聞くことは、英語の力を伸ばすことに役立つと思いますか。</p> <p>⑧ ⑦の質問で、あなたが答えた理由を書いて下さい。</p> <p>⑨ 英語の授業で英語の歌を歌うことは、英語の力を伸ばすことに役立つと思いますか。</p> <p>⑩ ⑨の質問で、あなたが答えた理由を書いて下さい。</p> <p>⑪ この単元の授業を振り返っての感想を書いて下さい。</p> <p>※実際に生徒へのアンケート調査では①～⑨として実施したが、本論では棒グラフの表記の関係上、事後アンケートの番号表示を③～⑪に対応させた。</p>



写真1 バンドの生演奏に合わせて歌唱する生徒たち



写真2 左は全体、右はグループでの歌唱

5. 結果

各項目について点数化し平均を求めたものを比較したグラフは以下の通りである。

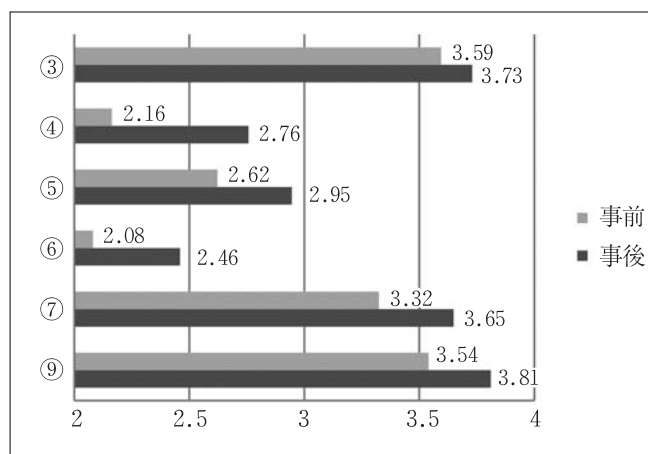


表1 調査項目の事前事後の比較

事後アンケート⑦「英語の授業で英語の歌を聞くことは、英語の力を伸ばすことに役立つと思いますか。」と⑨「英語の授業で英語の歌を歌うことは、英語の力を伸ばすことに役立つと思いますか。」についての主な記述は以下の通りである。

<p>事後アンケート⑦の主な記述</p> <p>〈肯定的な記述〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歌として意識して聞き取ろうとすることで、さらに力を伸ばすことができるから。 ・歌の中に出てくる単語が少しでもわかるようになるから。 ・リスニングの勉強になるから。 ・耳で英語に慣れることで、テストの聞き取りに役立つと思うから。 ・ただ英文で覚えるより、歌の方が覚えやすいから。 ・耳に入ってくれば、結構覚えることができるし、その歌の興味から英語への興味が広がるかもしれないから。 ・本物の英語を聞くことは英語の力を伸ばすと思う。また歌なので親しみやすく、役に立つと思う。 ・英語の発音がわかり、身近に生の演奏にふれることができるから。 ・いろんな歌を聞くことができるので、楽しむことができる。 <p>〈否定的な記述〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・書いた方が力が付くから。 ・歌の発音は、省略されていることが多いので、リスニングにはあまり役に立たず、歌詞の意味を考える、訳すことにしか役立たないと思う。 ・英語がちゃんと聞き取れるなら、勉強になるだろうが、聞き取れないものも多かったりするので、わからない。 ・英語の教科書の進度が遅くなる。 ・習っていない単語が出たりして、あまり伸びないと思う。 ・歌のレベルによる。 ・発音、アクセントが違うため、普通に勉強した方が実力がつく。 	<p>事後アンケート⑨の主な記述</p> <p>〈肯定的な記述〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語の歌は楽しいので、楽しみながら英語力が付くと思うから。 ・聞いているだけでなく、歌うことで英語がすらすらしゃべれるようになると思う。 ・リズムを感じ取ったりすることで、英語の発音もよくなると思うから。 ・発音や短縮して話すスキルが伸びると思うから。 ・難しいけど、楽しいから。 ・歌うときも、日本語の歌と同じように気持ちを込めて歌えるのでいい。 ・英語の本場の発音、イントネーション、リズムにのせて、楽しく体に覚えさせることができると思う。 ・普通の授業でも楽しくできるから、英語は楽しいと思えそうだから。 ・声を出すことで、速く英語を話すことができるから。 ・歌えばリズムで覚えられると思う。 ・つながった英語を気軽に使うことができていると思う。 ・自分で意味を理解しながら歌えば、力が伸びると思う。 ・歌うことで、楽しみながら力を伸ばすことができる。 ・しっかりと正しい英語の発音を身に付けることができると思うし、表現力をつけることができる。 <p>〈否定的な記述〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・書いた方が力が付くから。 ・英語ではなく、日本語でしゃべるように発音してしまうから。 ・あまり歌っていても、単語の意味がわかっていないとだめなように思うから。 ・歌っていても発音がわからないまま歌っているかもしれないから。 ・英語の教科書の進度が遅くなる。 ・歌のレベルによる。(歌えるものは力になるが、歌えないものは意味がない) ・発音、アクセントが違うため、普通に勉強した方が実力がつく。
---	---

音楽科の視点から抽出した事後アンケートの記述から

<ul style="list-style-type: none"> ・しっかりと正しい英語の発音を身に付けることができると思うし、表現力をつけることができ、ミュージカル等にも生かせると思うから。 ・英語の本場の発音、イントネーション、リズムにのせて、楽しく体に覚えさせることができると思う。 ・歌えばリズムで覚えられると思う。 ・英語の発音がわかり、身近に生の演奏にふれることができるから。 ・いろんな歌を聞くことができるので楽しむことができる。 ・歌の中に出てくる単語が少しでもわかるようになるから。 ・歌で英語に慣れておくと、リスニングに役立つから。 ・英語の歌は楽しいので、楽しみながら英語力が付くと思うから。 ・歌うことによって単語の発音やしゃべり方が確実になるから。 ・英語の歌を聞いて、リズムを感じ取ったり、英語の発音もよくなると思うから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・つながった英語を気軽に使うことができていると思う。 ・歌うことで、知らない単語や発音がわかる。 ・自分で意味を理解しながら歌えば、力が伸びると思う。 ・歌えば身につくことも多いけど、聞くだけだと意味もよくわからないから。 ・ただ英文で覚えるより、歌の方が覚えやすいから。 ・耳に入ってくれば、結構覚えることができるし、その歌の興味から英語への・興味が広がるかもしれないから。 ・英語の歌を聞くことで、相手と会話するときの練習になるから。 ・本物の英語を聞くことは英語の力を伸ばすと思う。また歌なので親しみやすく、役に立つと思う。 ・リズムに乗ることで、発音がより正確に導かれたり、イントネーションの感覚が把握できた。 <ul style="list-style-type: none"> ・歌うときも、日本語の歌と同じように気持ちを込めて歌えるのでいいと思う。
---	---

6. 考察

(1) クロスカリキュラムによる授業の、生徒の音楽における表現力に及ぼす影響

音楽の観点からの分析として、上記の生徒の事後アンケートの記述、パフォーマンス評価および、伴奏にかかわったり歌唱指導に携わった6名のインストラクターの手応え等を総じて、次のような表現力にかかわる成果が得られたものと捉える。

リズム・アンド・ブルース（R B &）であるこの曲は、アフリカ系アメリカ人の音楽のルーツが色濃く、複雑なリズムが言葉と絡み合っている。そのため、曲の全体を歌唱することは、中学2年生には極めて難易度が高い楽曲であった。にもかかわらず、曲の後半の箇所において、“3, 3, 3,”と数える際に、楽譜の上では|♪♪♪♪|♪♪♪♪|のように3拍カウントする休符において、身体を使って裏拍を感じながら音楽の拍子に乗り、難なく歌いこなす工夫が随所で自然に行われていた。

また、歌のフィナーレにおける“3, 33, 30, 27, 3, 24, 21, 18, 3, 15, 12, 9, 6, and 3, it's a magic number”を歌うところでは、たたみかけるようなリズムで|♪♪♪♪♪♪♪♪|と早口に一気に歌う難しさと同時に、16休符の直後に歌い出す箇所や、32分休符の直後に歌い出す箇所もあるため、楽譜そのものも存在しないために、生徒たちにとっては、耳コピーでチャレンジする手段しかない状況であったが、ここにおいても概ねリズムを体得し、暗唱することができていた。

かくして、リズム・アンド・ブルース独特のアドリブ的な不規則なリズムを僅かな時間の中で体得できた生徒がほとんどであった。このたびの教材においては、聴く活動に集中することに加えて、身体表現を取り入れることで、複雑なリズムから、そのグルーブ感を体得するという新しい試みによって、これまでの音楽科の教科書教材では触れる機会の無かったジャンルの曲の習得方法を学ぶなど、生徒たちの新たな音楽経験が広められたものと捉える。

附属中学校の伝統的な行事であり、毎年3年生が12月に上演する、「ミュージカル発表会等にも生かせる」という感想は、同校のミュージカル上演の中で英語の歌がしばしば取り上げられることから、舞台を意識した表現にこの学習の成果を発展的に応用したいという生徒の意欲が読み取れる。

以下は、ビデオ撮影による主なパフォーマンス評価であり、①から③までの授業の流れと共に記載した。

- ① バンドの演奏に合わせて、クラス全員で通しの歌唱。2回目の通し練習から、男子の8割はほとんど歌詞カードを見ないで手拍子を入れて歌っていた。女子は逆に半数以上が歌詞カードに見入ったまま、注意深く歌唱していた。
- ② 各グループに分かれて、各々のラジカセを使って歌唱の練習を行った。グループは生徒の意志で自由に組ませたところ、男子は5名、6名、7名の計3グループ、女子は4名、5名、5名、5名の計4つのグループを形成し、計7台のラジカセを各々囲み、約30分間の練習に取組んだ。上記の6名の指導者がランダムに、各グループの活動を助言、支援して回った。

ベース奏者として演奏の伴奏にかかわった音楽コースの院生Hは、男子6名のグループに入るなりギターは傍らに置き、肩を揺らすように全身で激しく16ビートに合わせた小刻みな動きで生徒たちにリズムを体得させた。これは、頭でカウントするよりも、体全体でリズムを捉えた方が、容易に体得できることを狙ってのアプローチであった。始めは、敬遠気味な様子であった男子生徒たちも、程なく表情を和らげ、ビートに乗ったリズムのカウントを身体表現で行う術を身に付けていった。

一方、女子のグループでは、歌詞を正確に歌うことに集中していたが、時得が上記の院生と同じく、オーバーな身体表現でダンスをするように歌ってみせたりするうちに、リズムに乗った歌唱へと導かれていった。同じく、女子のグループと円座するように座ってギターを弾き始めた水谷もギターを傍らに置き、手拍子でリズムのカウントをしながら歌うよう導いた。

- ③ 2時間続きの授業（短縮授業日となったため、45分×2時間で全90分）のラスト30分間には、各グループが順次、ビデオ撮影の記録に臨んだ。前半の3回の授業は英語の学習が中心で、机で埋まった状態の通常の教室での、狭い空感における学習であった。そのせいか、単元のまとめの2時間続きの授業が多目的教室という広いスペースで実施され、さらにはダンスビートのきいた、ノリのよい音楽がラジカセから響くという環境、そして同姓同志の気の合った仲間との共同の活動であることや、学期末試験も終えたリラックスした時期であったことなども影響したのか、生徒らの自由な発想が全開し、創作へのモチベーションに導かれたと分析する。その成果は、3グループ全ての男子グループからの見事な即興的な表現活動にも表れ、各グループそれぞれが楽曲の特徴を捉えた、独創性に富んだ創作を披露した。

以上の流れにさらに考察を加える。生徒の創作活動において、人前での発表の場面では7～8割の完成という途上であったとしても、とにかく発表にトライしてみることから発見できること、理解できることは多々あるのではないかと、観察指導に携わったメンバーの何人かは共通の仮説を持った。事実、男子3グループの表現は、いずれも未完成であることにためらわず、どんどん形に表出することで、表現をまとめ上げる姿勢が見られた。一方、歌への完成

度に執着する傾向が強かった女子のグループでは、新しい表現に立ち向かう段階を慎重に捉えずぎていたように受け止めた。また、子どもたちの人間関係が創作活動の際、チームワークに大きくかかわることが、観察した6名の指導メンバーの全員から聞かれた感想であった。

(2) クロスカリキュラムによる授業の、生徒の英語力の伸長に及ぼす影響

表1の結果からも明らかなように、全ての項目について数値の上昇が見られた。項目⑦の、英語の歌を聞くことは英語力を伸ばすことに役立つと思うかという問い、および項目⑨の英語の歌を歌うことは、英語の力を伸ばすことに役立つと思うかという問いに着目すると、否定的な意見の記述も僅かに見られるものの、多くの生徒が授業の有効性を記述していることに加え、かなりの数値の上昇が見られることから、この授業の成果が認められるものと捉える。そして、多くの生徒の記述からも、この授業は生徒の英語力、主に「聞く」と「話す」力の両方の伸長に有効であったと考えられる。また、項目⑤の、英語の歌を聞くことは好きかという問いや、⑥の英語の歌を歌うことは好きかという問いに着目すると、前述の問いよりもさらに大幅な数値の上昇が見られ、特に歌う活動後の大幅な伸びからも、クロスカリキュラムによる授業は生徒の英語に対する興味関心を高めるのに有効であったと考えられる。これは前述の音楽や表現活動の視点からのパフォーマンス評価からも裏付けられる。

一方、英語の視点からのパフォーマンス評価および生徒の記述からの成果の事例を述べるならば、語と語の連結による読み方の変化について、などを体得することができたという点であろう。英語の歌を歌う際には一語一語切り離して発音せず、複数の語を連続して発音するケースが多い。語と語の連結により、英語をなめらかにかつリズムカルに話すことができるような会話の練習につながることを指摘する生徒も見られた。こうしたセンテンスがこの歌の中にはふんだんに登場しており、文章を読むだけでは把握しにくい連語の読み方や発音の変化を歌に乗せることで、スムーズに会得することができたと述べている。

リズム、イントネーションなどの音楽的な要素はもちろん、英語の歌詞からは生活習慣、歌の合間のアドリブ的な相づちの打ち方など、生徒にとっては未知のスタイルに満ちている題材であったようだ。そうした異なる文化の表現の持つ、新鮮な表現に戸惑いながらも、興味関心を示していたことが、上記の音楽科の視点から抽出された記述からも読み取れる。また、歌詞のやり取りが英会話に生かされると答えた生徒がいたが、歌手のJ・ジョンソンがバックコーラスの子どもたちにリサイクルのさまざまな提案を語りかけるような歌い方をしていることから、生徒らは口語表現を学んでいたり、コミュニケーションの間違いを感じ取っていたのではないかと受け止める。本実践の歌唱活動では、英語の歌詞を拡大コピーしたボードの単語を順次指し示しながら、生演奏の判奏に合わせて反復練習を行ったことも、生徒の視線を手元の紙に向けるよりも、視覚的にも一斉に正確な歌詞を確認できたり、発声が床ではなく上部に向けられるなどのメリットも得られた。

この楽曲のその他の特徴として、上昇調と下降調の発音やイントネーションが頻繁に登場する。全単元を通じても僅か5時間という授業時間内の学習であったため、中間部分の難しい箇所を含む一部の箇所については、習得と完成に至らなかったものの、難易度の高い部分における歌詞の把握では、生徒の記述からもイメージとしてはできそうだと感想が得られていた。

男子の3グループのうち、取り分け早期に歌唱をマスターすることができた1グループがあった。そのグループには、米国からの帰国子女である生徒と英語を母国語とする保護者を持つ生徒が加わっており、歌唱活動においても短時間での習得が見られた。また、歌唱の充実が土台となって自信を得ているこうしたグループでは、全員の身体表現活動の探求も活発で、さまざまな工夫を凝らすなど、生き生きとした表情で創作に取り組む様子が観察された。

7. 教育的示唆

(1) 結果の主な分析と課題

考察においても述べたように、英語、音楽（歌、表現）に関する興味関心は授業前よりも、歌唱と共に創作活動の授業を経て後、格段にその高まりが認められた。同様に聞く力、話す力の伸長も生徒の記述回答からも、その成果が認められた。

特筆すべきは想定外の男子の身体表現の続出であった。授業前は、性差による表現活動の違いや授業前後の歌唱活動への意識の違いはあまり見られないのではないかと仮説を立てていた。しかし、仮説の想定をはるかに超え、パフォーマンスにおいては男子の積極的な身体表現活動が得られた。マイクを持って飛び出す生徒がいたり、EXILEの動きを取り入れるグループなど、男子3グループの全てから、さまざまな身体表現を伴うクリエイティブな創作活動が見られたのである。

これは性差や発達段階にも起因するものであろうと考える。女子は慎重に、まずメロディーと歌詞を把握してからと考えていたため、歌詞の完成度をより重視するグループが多く見られた。そのため、女子はビデオ撮影における身体表現に踏み出すグループは僅か1グループに止まった。それとても、ビデオ撮影を伴う本番の演奏では、5名全員がものおじした様子で、単に歌唱する活動に止め、用意していた手を動かさず降り付けをカメラの前で披露しなかった。

この女子の傾向は、性差による発達段階に起因しているものと分析しており、男子が人前での表現を意識せず、奔放に表現する傾向とは対照的に、そうした行為に戸惑いと抵抗を感じているものと捉える。一方、性差の伴う歌唱の音域への配慮が授業者側にとっての課題となった。女子からの要望によれば、ジャック・ジョンソンが男性であるため、歌のキイが女子生徒には低く、歌いづらかったとのことであった。このことから、今後は授業で採用する楽曲の音域を男女ともに考慮して設定することが見直された。

ところで、この3R'sという楽曲の楽譜の入手がこのたびはかなわなかった事情から、生徒の前でこの曲を範唱するために、歌唱指導担当の時得と中村は、2か月間かなりの練習を要した。にもかかわらず、生徒たちは合計4日間、僅か5時間の授業で複雑なリズムを伴うラップ的な歌唱箇所も難なくクリアし、曲の概要を体得することができていた。こうした結果から、中学生の時期、耳や身体感覚が柔軟な年代にこそ、多様な音楽スタイルを全身で体得することはさまざまな音楽文化を吸収する上でも重要であることが改めて確認された。

(2) 今後の展望

環境問題については、前半の英語科中心の授業の中で、中村が世界各国の環境にかかわるリサイクルの現状をデータで示すなど、環境の地球規模の必要性に関する学びに時間を割いた。また、楽曲の歌詞からも、「兄弟の古着をもう一度リサイクルすること」や「スーパーへはマイバッグを持参することでごみを減らせる」など、具体的な取組みの提案が歌われている。しかし、実際に行動してみることでリサイクルの重要性を体得するなどの活動や、倫理についての学びに広げるといった、より主体的かつより広範囲な学習活動との連携が、今回の実践を経てさらに示唆された。今後は幅広く理科や道徳、家庭科などとの連携も視野に入れ、多角的にカリキュラムを検討する可能性も見出していきたい。

次に授業のアプローチに関する成果や課題について触れたい。今回のギターを担当した英語科の水谷は、ギター演奏の技能を生かし、3R'sの伴奏および、4、5時間目における各グループへの演奏の助言指導にも携わった。また、英語科の中村は、洋楽を中心に幅広い音楽を鑑賞してきた音楽経験を生かし、ラッパーに変装して雰囲気盛り上げるなど、生徒のボーカル指導を時得と共に積極的にリードした。音楽科の時得は、洋楽の舞踊にも取組んできた経験を生かし、歌唱指導にアフタービートを強調するダンスの動きを取り入れながら、グループ感を伝達することに努めた。

本研究に共同で取り組み、かつ執筆に携わったこの3名共が、各々の教科専門を超えて、これまでにさまざまな音楽文化に触れる機会を体験しており、さらに各々の留学経験から、音楽の習得には異文化理解の学習が欠かせないという共通の認識をもっていたことも、このたびのクロスカリキュラムの実践を可能にしたものと捉える。

また、各教員が専門分野を超えて得意分野を生かし合い、本来の守備範囲にとらわれず、時には越境し合うことで、生徒の創作活動にも柔軟な発想をもって対応することができなかった。もとより表現力を高めるといった共通の課題を達成するには、必然的に教科の垣根を取り払い、互いの授業の中で培われた学びを生かし合うことが求められよう。例えば、現行の音楽科の教材で考察するならば、教育芸術社2・3年生下巻のビートルズの“Hey Jude”において、教科書の掲載ページに大きく示された、「言葉の流れを生かしながらリズムに乗って歌おう」を実践するには、英語の意味理解とそれに合致した発音への習熟は欠かすことができない。

そして、同教科書2・3年生下巻の歌唱および鑑賞教材、「自由への讃歌 (Hymn To Freedom)」においても、アフリカ系アメリカ人等の人種差別に関わる歴史的背景を学ぶ学習抜きには、作曲者であるオスカー・ピーターソン（アフリカ系カナダ人）の曲に託した心情は到底知りえないであろう。同時にジャズのシンコペーションやブルーノートの特徴を単に「リズムや音に注意して歌う」という、表面的な楽譜の記載に忠実な演奏を目指すことに止まらず、そのような表現を生み出した人々の気持ちに思いを寄せることは、歴史や文化の学習があつてこそ、実現するのではなかろうか。その意味でも、クロスカリキュラムによる学習は極めて重要であり、教科目標である「音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う」ためにも必要不可欠なアプローチであるといえよう。

再び今回の学習指導要領改訂の重要な主旨に目をむけるならば、音楽科においては音楽と生活や社会とのかかわりを実感できるように指導することが新たに示されたことに注目したい。このことは、これまで我が国が学校音楽を、より「芸術」の視点からとらえていたスタンスから、欧米など他の先進諸国に習って「音楽と人間」あるいは「音楽と社会」等の視点から、より総合的なコミュニケーション能力の育成へ向けて音楽科が貢献していくために、改善されるべき方向に転換していくことを示すものでもであろう。こうした学校音楽の大きな転換の時期を迎え、広義の表現活動の模索も教科を挙げての今後の課題となるであろう。

折しも、小学校高学年における外国語活動の本格的導入を目前に控え、身体表現や歌などでの表現活動を取り入れることで、子どもたちがより主体的に学ぶ、実践レベルでも活用できる英語の学習が実現することに寄せられる期待は大きい。

そうしたニーズも高まる現状にあつて、国際理解教育においても、表現活動がかかわったカリキュラム開発は極めて重要であり、よりグローバルな視野からの学びを実現するためにも、音楽科や英語科を始めとする他教科・領域とのクロスカリキュラムの探求が、今後ますます積極的に展開されることが切望される。

資料1 単元の流れ 全5時間

T1=Music teacher/T2=English teacher

時間	主な学習活動(○)	○評価・△教師の指導・留意点
1	英語の歌を楽しもう	
	<p>(事前にアンケートを行う)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ガイダンスを聞き、活動についての見通しをもつ。 ○英語の歌を聞く。 ○どんな内容かを予想し、発表する。 ○英語の歌を聞き、自分が聞き取れた単語を発表する。 ○英語の歌のタイトルを予想し、発表する。 ○英語の歌を歌う。 <p>○本時の活動を振り返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○活動のガイダンスを行い、活動内容や目標について説明する。 △T2は生徒の発言を板書する。 △歌詞カードを提示する。 ○声はもちろん、体全体を使い英語の歌を歌うことができたか。【表現】 △英語の歌詞よりも、リズムやメロディーに注意して歌う。 ○興味・関心をもって活動に取り組むことができたか。【関・意・態】
2	英語の歌を味わおう	
	<ul style="list-style-type: none"> ○英語の歌を聞く。 ○ワークシートを用い、文法事項や表現、単語を確認する。 ○歌詞の意味を理解する。 <p>○海外の3R'sの実情についての資料を読み取り日本の実情を理解する。</p> <p>○歌詞の内容に込められたアーティストの思いや考えを自分の思いや考えを基に、自分の思いや考えをワークシートに記入し、発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○英語の歌を聞く。 ○歌を聞きながら一つ一つの単語を追う。 ○歌を聞きながら、下線部分に注意して小さな声で繰り返し歌う。 <p>○②について、CDに併せて実際に歌う。</p> <p>○本時の活動を振り返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> △フラッシュカードやセンテンスカードを用いて新出単語や文法、表現を説明する。 △生徒の既習事項と関連付けながら、内容の読み取りを進める。 ○英語の歌の鑑賞を通して、文法事項や表現、単語を理解し、歌詞の意味を理解することができたか。【理解】 ○資料を正しく読み取り、3R'sの実情について理解を深めることができたか。【理解】 ○歌詞に込められたアーティストの思いや考えをイメージすることができたか。【関・意・態】 ○自分の思いや考えを、ワークシートに適切に記入することができたか。【表現】 △単語自体の読み方と歌における単語の読まれ方の違いに気付かせる。 △単語の読みにとらわれず、聞こえた通りに歌うように助言する。 ○音楽に併せて、適切に英語を発音することができたか。【表現】 ○興味・関心をもって活動に取り組むことができたか。【関・意・態】
	英語の歌をセッションしよう	
	<ul style="list-style-type: none"> ○復習としてAパートを練習する。(T1) ○生演奏を聞く。 ○T2の後についてBパート、Cパートを練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○声はもちろん、体全体を使い、英語の歌を歌うことができたか。【表現】 △生徒に活動のゴールを明確に提示する。 △ゆっくりとしたテンポで、1文ずつ練習する。
	<p>A : Reduce, Reuse, Recycle. A : Three, it's a magic number. Yes it is, it's a magic number. Because two times three is six. And three times six is eighteen. And the gighteenth letter in the alphabet is R. We got three R's, we're going to talk about today. C : 3, 3, 3, 3, 6, 9, 12, 15, 3, 18, 21, 24, 27, 3, 30, 33, 36, 3, 33, 30, 27, 3, 24, 21, 18, 3, 15, 12, 9, 6, and 3, it's a magic number</p>	
	<p>① If you're going to the market to buy same juice, you've got to bring your own bags and you learn to reduce your waste. And if your brother or your sister's got same cool clothes you could try them on before you buy some more of those. Reuse, we've got to learn to reuse. And if the first two R's don't work out and if you've got make some trash, don't throw it out.</p> <p>② 3, 3, 3 3, 6, 9, 12, 15, 3, 18, 21, 24, 27, 3, 30, 33, 36, 3, 30, 27, 3, 24, 21, 18, 3, 15, 12, 9, 6, and 3, it's a magic number.</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> ○グループに分かれ練習をする。 ○全体で通し練習を行う。 ○リハーサルを行う。 ○本番 ○本時の活動を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> △CDとデッキを生徒に配布し、T1, T2, ゲストティーチャーは各グループを回り、指導にあたる。 ○英語の発音やリズム、音楽の音程やテンポに気を付けながら、歌うことができたか。【表現】 △ビデオ撮影する。 △興味・関心をもって活動に取り組むことができたか。【関・意・態度】

資料2 3R'sの歌詞 (授業実施時の配布資料)

Let's sing "3 R's"!!

Three it's a **magic number**
 Yes it is, it's a **magic number**
 Because **two times three** is **six**
 And **three times six** is **eighteen**
 And the **eighteenth letter in the alphabet** is **R**
 We got **three R's** we're going to talk about today

We've got to **learn** to
Reduce, Reuse, Recycle
 (Repeat)

Where if you're going to the **market** to **buy** some juice
 You've got to **bring** your own **bags** and you learn to reduce your waste
 You've got to learn to reduce

And if your **brother** or your **sister's** got some **cool clothes**
 You could **Try** them on before you buy some more of those
 Reuse, we've got to learn to reuse

And if the **first two R's don't work out**
 And if you've got to make some trash
 Don't throw it out
Recycle, we've got to learn to recycle,

We've got to learn to
Reduce, Reuse, Recycle
 (Repeat)

Because **three** it's a **magic number**
 Yes it **is**, it's a **magic number**

(Instrumental Music)

3, 3, 3,

3, 6, 9, 12, 15, **3,** 18, 21, 24, 27, **3,** 30, 33, 36

3, 33, 30, 27, **3,** 24, 21, 18, **3,** 15, 12, 9, 6, and

3, it's a **magic number**

※太字を強く歌うとGOOD!!



写真3 グループ毎に歌唱練習する様子



写真4 EXILEの動きを取り入れたパフォーマンス

本教材の作詞・作曲・演奏者について

ジャック・ジョンソン (Jack Johnson, 1975~) は、アメリカ合衆国ハワイ州オアフ島出身の男性ミュージシャン・シンガーソングライター。アコースティック・ギターの心地よいサウンドが特徴。2006年には、絵本『ひとまねこざる (おさるのジョージ)』の映画音楽を手掛け、そのサントラを兼ねた『シング・ア・ロング・アンド・ララバイズ・フォー・ザ・フィルム：キュリアス・ジョージ』の中に環境問題を呼び掛ける“3R's”は収録された。

参考・引用文献

- 野上智行. (1996). 『総合的学習への提言—教科をクロスする授業1「クロスカリキュラム」理論と方法』東京：明治図書.
- 時得紀子. (1997). 「総合的学習と表現教育」村川雅弘編著『総合的学習のすすめ』東京：日本文教出版. pp.131-148.
- 時得紀子. (2002). 「総合的な学習における音楽科のかかわり」日本学校音楽教育実践学会編『音楽科と他教科のかかわり』東京：音楽之友社. pp.19-23.
- 教育芸術社. (2006). 『中学校の音楽 1, 2-3上巻, 2-3下巻』
- 文部科学省. (2008). 『中学校学習指導要領解説 音楽編 (平成20年9月)』東京：教育芸術社.
- 文部科学省. (2008). 『中学校学習指導要領解説 外国語編 (平成20年9月)』東京：開隆堂.
- Shweder, R. (1991). *Thinking Through Cultures*. Harvard University Press.
- McGRAW-HILL. (2000). *Share the Music*, K-9. New York: McGRAW-HILL School Division.
- New York City Department of Education. (2004). *Blueprint for teaching and learning in the arts: Grades K-12*. New York: New York City Department of Education.
- Lynch, P. (2007). Making meaning many ways: An exploratory look at integrating the Arts with classroom curriculum. *The journal of the art education association*, 60(4), 33-38.